２０２３年度

愛知の外国語教育

（第52集）

も　く　じ

Ⅰ　はじめに ……２

Ⅱ　本年度の研究活動

(1) 第73次教育研究愛知県集会でのとりくみ

研究内容

主体的に学習にとりくむ態度を育む指導のあり方

自分の気持ちや考えを主体的に伝え合う生徒の育成

―「２年生Unit５ What a nice idea! AETの先生の役に立ちたい」の実践を通して―‥３

コミュニケーションの基礎となる資質・能力を育む言語活動のあり方

自ら「話したい！」「伝えたい！」とコミュニケーションを図ろうとする生徒の育成

―２年生“Food Travels around the World”の実践を通して―……５

思考力・判断力・表現力を育む言語活動のあり方

即興的に外国語で会話できる生徒の育成をめざして……７

(2) 子どもたちの「生きる力」を育む教育課程編成へのとりくみ

主体的に考えながら表現することのできる生徒の育成

―自己紹介の実践を通して　―……９

愛知教職員組合連合会　教育課程研究委員会外国語部会

２０２３年度　　教育課程研究委員

ブロック推せん　　◎部長　○副部長

名古屋			尾　張			三　河		
名　　前	単 組	学校名	名　　前	単 組	学校名	名　　前	単 組	学校名
大脇　芳則	名古屋	天神山中	松浦　昂平	春日井	鷹来中	○楠崎　寛人	豊田	野見小
鈴木　ひと恵	名古屋	若水中	○加藤　直樹	稲沢	明治中	◎鈴木　啓仁	豊川	一宮東部小

第69次～72第次教育研究集会全国集会リポート提出者

69 次			71 次			72 次		
名　　前	単組	学校名	名　　前	単組	学校名	名　　前	単組	学校名
佐藤公哉	稲沢	大里東小	青木龍一	一宮	萩原中	白澤義顕	蒲郡	三谷中

第73次教育研究全国集会　リポート提出者　足立友里（稲沢・平和中）

Ⅰ　はじめに

教育課程研究委員会外国語部会では、以下にあげる基本的な考えのもと、第73次教育研究活動の重点である「学びの質をより追究するとともに、子どもたち一人ひとりの意欲を大切にし、学ぶ喜び・わかる楽しさを保障する教育課程編成活動」「学校・地域の特色をいかし、家庭や地域社会と協働をはかりながら、人・自然・文化などとのかかわりを大切にした創意あふれる教育課程編成活動」をふまえて研究をすすめている。

【基本的な考え】

- 各学校や地域の特性をいかし、子どもたちにとってわかりやすく楽しい学びを実現するための手だてを工夫する。
- 扱う言語材料は、「聞くこと」「話すこと（やり取り・発表）」「読むこと」「書くこと」におけるコミュニケーション能力の総合的な育成をめざし、実際の目的、場面、状況を意識した言語活動を通して学べるようにする。
- 小学校外国語の教科化により、いっそう小中学校の連携を推進する。また、他教科との連携を学校ぐるみで検討し、年間計画にもとづく指導を展開していく。

さて、第73次教育研究集会にむけて、22本のリポートが提出された。子どもたちが楽しみながら英語を学び、積極的に自己表現できる力の育成をめざしたものが中心であった。本次県集会では、以下の三つの討論の柱ごとに、小グループによるリポート発表と討論が行われた。その後、各グループからの問題提起をもとに、全体で討論と意見共有が行われた。

1　主体的に学習にとりくむ態度を育む指導のあり方
2　コミュニケーションの基礎となる資質・能力を育む言語活動のあり方
3　思考力・判断力・表現力を育む言語活動のあり方

以下に、教育課程研究委員会で検討された興味ある実践報告と、教育課程研究委員の行った実践報告を紹介する。快くご了解いただき、リポートの再編を行っていただいたことに、この紙面をお借りして改めて感謝の意を表したい。

来年度への課題については、以下の２点があげられる。

- 学年間や小中学校の効果的な接続を意識した指導方法のあり方
- 子どもたちが主体的に学び、かかわり合う言語活動のあり方

本次県集会の成果と教育課程研究委員会外国語部会の研究内容をふまえ、今後も継続的な研究実践をすすめていきたい。

Ⅱ　本年度の研究活動

（１）第73次教育研究愛知県集会でのとりくみ

主体的に学習にとりくむ態度を育む指導のあり方

自分の気持ちや考えを主体的に伝え合う生徒の育成
～「２年生 Unit５　What a nice idea!　AET の先生の役に立ちたい」の実践を通して～

豊川市立小坂井中学校　古市　真沙美

１　主題設定の理由

本校の生徒は、決まりきった一問一答の Pair Talk には慣れてきており、お互いに教え合ったり、かかわり合おうとしたりする。しかし、自分の気持ちや考えを伝え合うために、相手の言ったことに対してひと言付け加えたり、リアクションをとって対話を膨らませたりすることができないことが課題である。生徒がよりゆたかなコミュニケーションをとることができるようにするために、パターン練習だけではなく実生活の場面を想定したやり取りができるようにしたいと考え、本主題を設定し、研究にとりくむことにした。

２　研究の方法

（１）めざす生徒像

・自分の気持ちや考えを大切にし、主体的にコミュニケーション活動にとりくむことができる生徒
・相手とのやり取りを通して、自分の気持ちや考えを発信したり、目的、場面、状況に応じて即興で伝え合ったりすることができる生徒

（２）研究の手だて

手だてⅠ―ⅰ　身近な日常生活の場面を設定する。
手だてⅠ―ⅱ　マインドマップを活用した協働学習をする。
手だてⅡ―ⅰ　スモールトークを継続する。（即興力）
手だてⅡ―ⅱ　プレゼンテーションをもとにしたやり取りの場を設定する。（発信力）

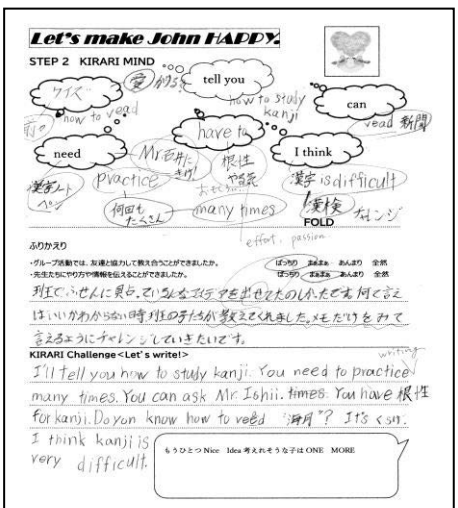
３　研究の実践と考察

（１）【手だてⅠ－ⅰ】身近な日常生活の場面設定

単元の導入では、卵のような形をした UD 商品のホチキスやはさみを紹介した。教員は “Do you know how to use this?” と投げかけた。実際に商品を手にとりながら、「どこが使いやすい‘easily’なのか」と全体で考え、簡単な単語や説明を加えてやり取りした。単元を通して、AET の先生が家庭や学校で困っていることを聞き、なんとか解決策を考えて助けたいとする内発的動機付けをすることで、主体的な取組につながっていくと考えた。

（２）【手だてⅠ－ⅱ】マインドマップを活用した協働学習

AET の先生の実生活における困っていることや知りたいことを聞き、その解決策をグループで考えて発表した。グループで意見を出し合う際には、一人ずつに何枚かの付箋を渡し、その付箋をグループのマインドマップボードに貼り付けていく。マインドマップを活用することで、思考を視覚化し、自分の考えを整理することができる。そして、仲間との教え合いを通して、よりよい表現を考えたり、アイディアを膨らませたりしながら、興味関心が高まり、自分の気持ちや考えをもって、主体的な取組につなげることができた（資料１）。



資料１　生徒が書いたマインドマップ

（３）【手だてⅡ－ⅰ】スモールトークの継続（即興力）

帯活動として、スモールトークを継続的に行う。同じ話題で、やり取りに３回挑戦する。まずは１回目の TRY、そして「どうやって英語にすればいいのかな？」という気持ちを全体で共有する（中

間交流)。教員からの問いかけによって、既習表現を活用し、やり取りを膨らませることができるようにする。２回目は、同じペアで行い、３回目には、違う相手とやり取りに挑戦する。「１回目よりは、やり取りがつながった気がする」という手応えを積み重ねる。本単元では、UD 商品の紹介や「疑問詞＋動詞の原形」の言語材料が扱われているため、本時では、“What Doraemon’s goods do you want?”をテーマにスモールトークを行った。暗記パンの話題になると予想されたので、教員は実際に食パンを準備し、やり取りに使えるよう、それを差し出した。“Do you know how to use ankipan?　Please tell me.”と教員が生徒に問いかけると、「Yes! 教科書にパンを置いて、食べる。そうすると漢字が覚えられる。おくって Put？食べるは eat だよね。」と返答し、「どうやって使い方を説明すればいいのだろう。」とペアで考え出した。教員とやり取りしたことを思い出しながら、１回目よりも２回目の方がパンを手に取って、その使い方を英語とジェスチャーで説明したり、対話を膨らませたりしていた。

（４）　【手だてⅡ―ⅱ】プレゼンテーションをもとにしたやり取りの場の設定（発信力）

AET の先生に伝えるために、一つの話題に対して、つながりのあるまとまった内容を発表し、それをもとに先生や仲間とのやり取りに挑戦した。それぞれの班では、よりわかりやすく伝えるために、ジェスチャーを使ったり、楽しいクイズを取り入れたりしていた。資料２の下線部は、教員がファシリテーターとなり、簡単な既習表現を使って、Q and A でやり取りしながら、ヒントとなるキーワードを与えた箇所である。そうすることで、生徒がやり取りを膨らませたり、感想や自分の考えをひと言付け足すことができたりするように促した。「根性」というキーワードを教員は取り上げて、やり取りを楽しませるようにした。また、教員は、生徒から I. K 先生についての情報を引き出そうと、質問を投げかけると、生徒 S2 が“I think…”を用いて自分の意見を伝え、プラス一文を付け加えた。AET の先生に、“Sounds nice! I want to try it!”とリアクションしてもらえると、生徒たちはさらに他のアイディアも考えようと意欲的にとりくみ、英語で伝え合う楽しさを実感することができていた。

S1: I’ll tell you how to learn kanji.
S2: 初めに、you have to buy　漢字ドリル. We use it. It’s do my homework.
（机の中から漢字ドリルを取り出して、ペラペラ中身を見せながら）
T: Oh, I see. Do you practice every day?
S2: practice ってなに？
S3: 練習だよ。
S2: Oh, Yes. Practice. very hard. for 漢字テスト. We have to study kanji. But I don’t like kanji.
S4: Me, too. It’s very difficult kanji. 覚えれんよね。
S2: I can’t memorize many many kanji.
T: OK. I’ll check it out. I need 漢字ドリル, and・・・・・What elese?ほかには？
S3: You need ドリル、a pen, and notebook. （ペンやノートを手に取って、示しながら）
S2:　And やる気.根性.
T: 根性？What does it mean? How do you say 根性 in English?
S3: 根性。覚える量多くてもあきらめない心。強い心。
S2: 強いは、Strong？
S3: 心は？ heart か？
S1: You need a strong heart. Write many many times. （ノートに書くジェスチャー）
T: Ha!ha! Do you have a strong heart?
S1: え?　So so （笑）（隣にいる S3 を指さしながら）But　S3 have a strong heart.
S3: え？おれ？Yes, Yes. I have a strong heart.
S4: 次は？I 先生のこと言おう。Next, do you know Mr. I?
T: No, I don’t. Is he a teacher in this school?
S4: Yes. He is our Japanese teacher.
T: Is he kind? Nice? Scary?
S2: I think he is very kind. He knows many many kanji. I 先生に聞いて、って何ていう？
S2: 質問する？question か？

資料２　授業記録

４　実践を振り返って

スモールトークでのやり取りが、グループ発表の場にもいかされていた。つまり、適切なリアクションをとったり、即興で伝えたりする「即興力」をスモールトークで培い、それを土台にして、自分の気持ちや考えを伝える「発信力」を育んでいたといえる。しかし、パフォーマンステストへの振り返りには、「簡単な単語だけではなく、習った表現をもっと使えるようになりたい」「とっさに言いたいことが英語で出てこない」という記述もみられた。今後も、生徒が自分の考えや表現を広げたり深めたりできるように、ペアやグループ活動でのやり取りや協働学習による学び合いを積極的に取り入れていきたい。そして、このようなやり取りを膨らませる活動に継続的に挑戦することで、中学校を卒業する頃には、自分の気持ちや考えを伝え合うことができる生徒に成長してほしいと願っている。

自ら「話したい！」「伝えたい！」とコミュニケーションを図ろうとする生徒の育成
～２年生“Food Travels around the World”の実践を通して～

岡崎市立六ツ美中学校　榊原　由紀乃

１　主題設定の理由

本年度の生徒は、英語に対して比較的好印象を抱いている。しかし「英語で何と言ったらいいのかわからない」などという理由から、英語でのコミュニケーションについて、約７割の生徒が「あまり好きではない」もしくは「好きではない」と回答した。コミュニケーション活動を活発に行うためには、生徒自身が英語でのコミュニケーションに興味や関心をもち、その目的・場面・状況などを明確に理解し、見通しをもってとりくむことが必要である。このような実態から、より主体的に英語を使ってコミュニケーションを図ろうという態度を身につけてほしいと考え、この主題を設定した。

２　研究の方法

（１）　めざす生徒像

・英語でコミュニケーションをはかることに興味や関心をもつ姿。
・相手意識をもちながら、自分自身で状況に応じて思考・判断をしながら自発的にコミュニケーションを図ろうとする姿。

（２）　研究のてだて

手だてａ：単元を通した対外発信の場面設定
手だてｂ：おすすめのレストラン紹介の作成
手だてｃ：目的・場面・状況を意識した帯活動「Small Talk」の実施
手だてｄ：単元開始時・中間時・終末時の同一活動

３　実践

（１）　英語を使うことに対する切実感をもたせる工夫

①　単元を通した対外発信の場面設定【手だてａ】

単元を通して活動の目的・場面・状況を明確にするために、単元の始めに、対外発信のための場面設定を行った。今回、生徒に紹介したのは、アメリカ在住の中国系アメリカ人、レイモンドさんである。教員自身の知り合いだったことに加え、実際に日本に興味をもっている彼が日本に観光に来るということで、協力をお願いすることができた。まず、単元の導入として、レイモンドさんからの自己紹介メッセージを紹介した。未習の表現も含まれている自己紹介メッセ―ジであったが、チームで協力しながら、概要を読み取ることができた。また、チームでレイモンドからの質問へ回答を考えた際には、実在する人物ということから、返信を待ち遠しにする様子がみられた。自分自身も料理に興味があるということから、「日本の良さを教えてあげたい」と食べ物に関する質問について、熱心に答えようとしていた。

②　おすすめのレストラン紹介の作成【手だてｂ】

単元を通して、「おすすめのレストランを紹介しよう」という活動を行った。（資料１）特に、手順５・６の段階においては、生徒自身でよりよい英語表現を見つけることができるよう、時間をかけて繰り返し行った。活動において、英語を使

手順１	レイモンドさんからのメッセージを各自で読み取る。
手順２	レイモンドさんからのメッセージの内容をチームで確認する。
手順３	レイモンドさんが知りたい内容（メッセージの概要）をクラス全体で確認する。
手順４	返信内容をチームで相談し、英作文の担当を決める。 担当①：おすすめの食べ物を紹介する/担当②：おすすめのレストランを紹介する 担当③：おすすめポイント①を伝える/担当④：おすすめポイント②を伝える
手順５	担当の文章を各自で考える。
手順６	担当①～④の文を合わせ、返信文を完成させる。文法事項についてチームでよりよい表現がないか話し合う。

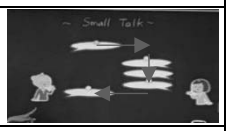
資料１：活動「おすすめのレストランを紹介しよう」の流れ

う切実感や、コミュニケーションを行うことへの興味や関心を生徒からいかに引き出すのか工夫をする必要があった。特に２点について留意した。１つめは、自分たちがレイモンドさんに何を伝えたいかに焦点を当てることで活動の目的を明確にして、英語で表現するように支援したことである。活動では、レイモンドさんからのメッセージを読み解き、レイモンドさんの好みを自分たちなりに考える時間を設けた。２つめは、実際のコミュニケーションの場面を想定するため、コミュニケーションの手段として、ＳＮＳの形に似せたスライドを用意した。また、生徒が記入するワークシートの形も同じようにＳＮＳの形にした。導入の際にパワーポイントを用いて、実際にメッセージをやり取りしているように、１つずつメッセージを提示していくと、生徒はワクワクした様子でスライドを見つめ、次にどんなメッセージが来るのか心待ちにしている様子がみられた。

（２）即興でのコミュニケーションに慣れるための工夫

①　目的・場面・状況を意識した帯活動「Small Talk」の実施【手だて c】

毎授業の授業開始５～１０分程度で、帯活動「Small Talk」を位置づけ、即興でのやり取りをする力をのばす言語活動にとりくんだ。会話のラリーが続くよう、３段階の目標を提示した。これにより、昨年度の研究では、生徒は段階を踏んで、即興的な会話においても、間違えることを恐れず、会話のラリーを続けることができるようになった。資料２は、実際に生徒に提示した３段階の目標である。本年度は、昨年度の研究で、「ジグザグ型」から「コーの字型」までを実際に経験した生徒も多かったため、生徒の実態に合わせながら、本単元では、第２段階のコの字型からスタートした。また、「Useful Phrases」を提示し、毎授業で意識することで、会話の内容に応じて、どの表現が必要か瞬時に判断し活用することができるようになった。また、３段階の目標に加え、コミュニケーションの目的・場面・状況を明確に提示した。「Small Talk」では、教員がたずねるべき質問（Main Questions）を提示するのではなく、場面のみを提示した。生徒は、登場人物になりきりながら、1 分間会話を続けることを目標とした。場面を提示する際は、教室の電子黒板に画像を表示させ、登場人物の名前や、セリフなどが書かれている画像をもとに、生徒はこの場面を想像して、その場面にあった会話を自由に１分間続けた。どの生徒も役になりきったり、提示された場面設定を意識したりすることで、自然とジェスチャーを使ったり、アイコンタクトをしたりするなど、相手意識をもって会話をする生徒が多くみられた。

段階	目標
第１段階 **【ジグザグ型】**	相手の質問に答えることを目標とする。
第２段階 **【コの字型】**	相手の質問に対して、答え＋１文を返すことを目標とする。
第３段階 **【コーの字型】**	相手の質問に対して、答え＋２文以上返すことを目標とする。 

資料２：「Small Talk」の目標

②　単元の開始時・中間時・終末時の同一活動【手だて d】

生徒自身が「わからない」「できない」という体験を通して、できるようになったときの達成感を味わうことができるように、単元の開始時・中間時・終末時に同一活動を行った。単元終末時の「Unit のふり返り」において「最初は文が短かったけど、3 回目は接続詞を使って長い文で詳しくレイモンドに紹介することができてうれしかったです。」と記した生徒が多かった。このことから、「できた」という達成感を実感することができたとわかる。

４　実践を振り返って

普段の授業を通して、生徒がもっと「話したい！」「伝えたい！」と感じられる工夫を今後も継続していきたい。そのために、生徒にとって魅力的な教材の提示をするだけではなく、外国の文化や暮らしなど、世界に関心を寄せることができるような授業を展開していきたいと考える。また、教科書の内容はもちろん、習得した英語表現を実際のコミュニケーションの場で活用する機会を大切にし、生徒が達成感を実感することができる工夫をしたい。

思考力・判断力・表現力を育む言語活動のあり方

即興的に外国語で会話できる生徒の育成をめざして

扶桑町立扶桑北中学校　髙木　淳

１　主題設定の理由

現在の中学生は、小学校から数多くの英単語を学習しているのにもかかわらず、自分の言葉として英語で表現することに苦手意識をもっている。このことから、学習した単語・文法を場面に合わせて活用し、即興的に英語で表現することが課題になっている現状がある。

英語を話すことに抵抗を感じている生徒にとって、どの場面でどう活用すればいいのかわからないことが原因の一つではないだろうか。そこで、場面を設定しながら即興的に英語を話す機会を設けることが必要だと考えた。授業内で活用する教科書の場面を吟味しながら、実生活に当てはめて表現活動を継続的に行うことで、即興的に英語を話すことができるようになるのではないかと考え、研究主題を設定した。

２　研究の仮設

ア　仮説１　英文の十分なインプットを与えるために、帯活動として継続的な取組を行うことで、即興的に英語を話すことができるだろう。

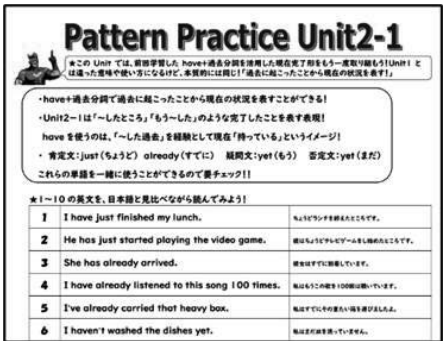
イ　仮説２　教科書の場面を学習した後、改めて自らの英語で場面の説明をすること（リテリング）で、自分の言葉として英語が使えるようになり、即興的に英語を話すことができるだろう。

ウ　仮説３　各単元で学習した文法を活用した表現活動を単元のまとめに設定することで、長い文章を生み出す力が身に付き、即興的に英語を話すことができるだろう。

３　研究の実際

（１）pattern practice と topic talk によるインプット・アウトプット活動

授業の最初に、必ず５分～１０分程度の帯活動を毎授業行ってきた。Pattern Practice は、単元内でターゲットとなる文法事項を扱った英文を繰り返し学習するものである。(資料１)即興的に英語を使って表現をする際に、どれだけ英文をインプットできているかどうかは重要なポイントとなる。毎時間行うことで、生徒の中でもこの活動が習慣化され、積極的に話すようになっていった。Pattern Practice で学習した内容は topic talk という会話活動にも活用をした。インプットした文法事項をアウトプットすることで知識のさらなる定着を促した。


Pattern Practice Unit2-1

★この Unit では、前回学習した have+過去分詞を活用した現在完了形をもう一度取り組もう！Unit1 とは違った意味や使い方になるけど、本質的には同じ！「過去に起こったことから現在の状況を表す！」

・have+過去分詞で過去に起こったことから現在の状況を表すことができる！
・Unit2－1は「～したところ」「もう～した」のような完了したことを表す表現！
have を使うのは、「～した過去」を経験として現在「持っている」というイメージ！
・ 肯定文：just（ちょうど） already（すでに） 疑問文：yet（もう） 否定文：yet（まだ）
これらの単語を一緒に使うことができるので要チェック！！

★1～10 の英文を、日本語と見比べながら読んでみよう！

1	I have just finished my lunch.	ちょうどランチを終えたところです。
2	He has just started playing the video game.	彼はちょうどテレビゲームをし始めたところです。
3	She has already arrived.	彼女はすでに到着しています。
4	I have already listened to this song 100 times.	私はもうこの歌を 100 回は聞いています。
5	I've already carried that heavy box.	私はすでにその重たい箱を運びました。
6	I haven't washed the dishes yet.	私はまだ皿を洗っていません。

【資料１：pattern practice ワークシート】

（２）場面・状況を説明するリテリング

各学年に応じた活動を経て、３年生からは本格的なリテリングを実施している。リテリングは、教科書の内容を自分の言葉で言い換えて相手に伝える活動になるため、まずは教科書本文の読み方も工夫をして指導した。「教科書を読む」という活動一つについても、ペアでさまざまな方法を実施しながら、教科書の内容理解を深めていった。ワークシートは段階に応じて読み方を工夫できるようにし、各自が工夫をして自分に合った読み方を実施できるようにした。

（３）リテリングを活用したパフォーマンステスト

授業内に生徒どうしで行っているリテリング活動を、ALT に聞いてもらう発表形式でパフ

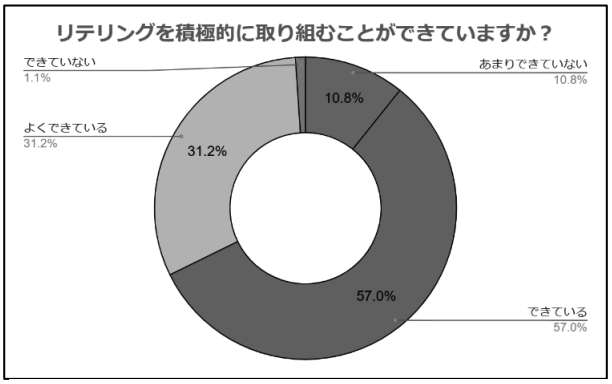
ォーマンステストを実施した。(資料２) 教科書の題材を自分の言葉でアレンジしながら説明し、自分の考えや気持ちを加えて説明することで、より深い学びにつながったと感じた。Unit2 のリテリングテストでは、俳句が題材となっている場面で、生徒が国語で学習している知識を含めて ALT に場面の説明を行うことができていた。カリキュラムマネジメントの観点からも、パフォーマンステストを通じて他教科との横断的な学習をすすめることができた。

【資料２：ALTによるパフォーマンステスト】

４　研究の成果

（１）リテリング活動を経て

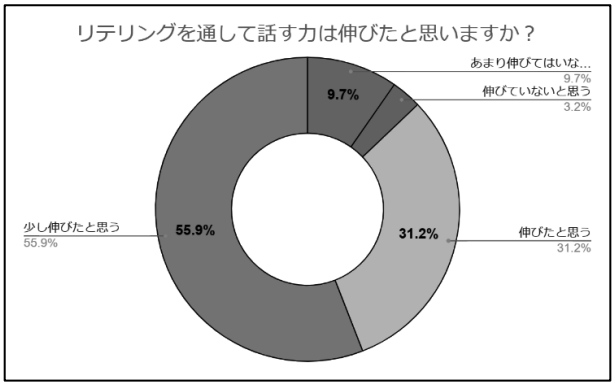
リテリング活動を通して､｢もっと自分の言葉で表現をしたい。｣｢即興的に英会話ができるようになりたい。｣という気持ちをもつ生徒が増えてきた。生徒の中には英語を話すことが苦手だと感じている生徒も多くいることは間違いないが、その中でも「わからないところを理解するために、自主的に友だちに聞いたり調べたりして意欲的に勉強できる。」「リテリングを行うと話の内容をより理解しようという気持ちになり、より積極的に英語の授業にとりくめる。」など多くが、前向きな発言をしている。(資料３)



【資料３　リテリング活動に関するアンケート】

（２）アンケート調査結果の分析

３年生になり、リテリング活動を継続的に行ってきたことをふまえて、話す力がのびたかどうかをアンケートで尋ねると（資料４）のような結果になった。その中には「ALT とのパフォーマンステストで､以前よりも話せるようになったと実感できているから。｣｢ALT にリテリングを発表するときに、よりよい表現を調べたり考えたりしてきたことで、前よりたくさんの表現を使って話せるようになったから。」という内容が多くみられた。



【資料４　リテリングの成果に関するアンケート】

５　おわりに

英語教育のあり方が目まぐるしく変化している現代で、英語教員がその変化に対応するための研究や実践にとりくむことが多くなってきている。本実践を通して、成果を感じることができた一方で、まだまだ授業改善が必要であることも感じた。改善を繰り返しながら、英語を使って生徒がいきいきと自分の気持ちを発信できる姿をめざしていこうと考えることができた。今後も、即興的に英語を話す力をのばすためにはどのような手だてが有効であるのかを見極めながら研究をすすめていきたい。

(2) 子どもたちの「生きる力」を育む教育課程編成へのとりくみ

主体的に考えながら表現することのできる生徒の育成
～自己紹介の実践を通して～

稲沢市立明治中学校 加藤　直樹

1　はじめに

本校の１年生は、多くの生徒が英語科の学習に対して前向きにとりくむことができる。授業中に帯活動として行っているペアでの単語の発音練習では、わからない単語の発音をお互いに聞き合いながら理解を深めようとする様子もみられる。一方で、自分の考えや思いについて、英語を用いての表現活動になると、「書くこと」と「話すこと」を難しいと感じ、作文や表現方法に自信がもてずにいる生徒が多い。

「話すこと」を難しいと感じる理由は、「発音の仕方が難しい」や「自分の伝えたいことが相手に伝わっているかわからない」などがあげられた。「英語を話せるようになりたい」という思いはあるけれど、どのように表現したらいいのかわからないというもどかしさがあることがわかった。

現行の学習指導要領では、「話すこと」において、［やり取り］と［発表］の２領域に分けられ、自分の考えや気持ちを相手に話したり伝えたりする力がより強く求められている。

そこで、仲間とかかわり合いながら学習にとりくめる生徒のよさをいかし、自分自身のことについて、相手に伝わるような発表の仕方を工夫して考えるという活動を設定し実践したい。

2　研究の手だて

手だて①

発表のテーマを「自己紹介～実はわたくし○○なんです！～」にすることで、発表に対する抵抗感を減らせられるように設定する。

手だて②

自己紹介文を日本語で考えてから英文にすることで、日本語とは違う英語特有の語順や構造を対比させ、視覚的に理解することができるようにする。また、表現方法を示すことで、簡潔に英文を作ることができるようにする。

手だて③

発表前にペアで練習を行い、内容や発表方法の確認を行うことで、発表にむけて自信をつけられるようにする。また、発表後にはアドバイスシートを用いて、友だちの発表のよかった点と改善するとよい点について記入し、次回以降の発表に用いられるようにする。

手だて④

発表している姿をタブレットで録画し、動画を見返すことで、声の大きさやジャスチャーなどが改善できるようにする。

3　研究の実際

（１）　手だて①②の実践と考察

自己紹介を全体の前で実践することを説明すると、生徒たちの反応は消極的であった。そこで、自己紹介のサブタイトルを「実はわたくし○○なんです！」として示すことにした。すると、「何を話そうかな」「みんなの知らない自分ってなんだろう」といった反応があり、生徒たちが意欲的に課題にとりくもうとする様子がみられた。自己紹介ではどんな内容を話せばよいかを確認した後、まずは日本語で自己紹介文を作成した。どの生徒も、「実は」と

いうサブテーマに沿った、聞き手が驚くような内容を考えてすすめることができた。

しかし、日本語から英語にしようとすると、２つの問題が出てきた。１つ目の問題は、語順の問題である。この問題を解決するために、日本語と英語の語順の違いを対比することを目的に、教科書のモデル文の日本語と英語の両方を提示し、主語と動詞をそれぞれ記号で囲わせ、視覚的にとらえられるようにした。

２つ目は、表現方法の問題である。生徒たちは、好きなものや好きではないものについては表現できるけれど、習い事や飼いたい動物などをどのように表現していいかわからない様子であった。そこで、既習の“I study ～.”を使えば、「勉強している＝習い事」、“I want ～.”を使えば「ほしい＝飼いたい」を表現できることを示した。すると、発表したい内容を既習の表現で伝えられるようになった。

（２）　手だて③の実践と考察

自分の発表が相手にうまく伝わるかを確認するために、ペアで練習を行った。初めての発表であるため、文章や発音に自信がもてず下を向いて小声で話す生徒が多くいた。さらにアドバイスをする活動でも、何を改善したらいいかわからずに会話が止まってしまうペアがあった。そこで、中間評価として、声の大きさや発音を意識して発表をしていた生徒を全体の場で紹介した。さらに、「聞き手」を意識した発表に必要な要素を全体で考える場を与えた。すると、「声の大きさ」「発音」の他に、「ジェスチャー」や「アイコンタクト」という意見が出てきた。その後のペア練習では、全体で確認した項目を意識した発表練習をすることができていた。

ペアで練習する姿

（３）　手だて④の実践と考察

２０１９年にスタートした「GIGA スクール構想」によって、「一人一台のタブレット端末」がすすめられ、教育現場でタブレットを活用した指導がますます求められている。そこで、タブレットの活用方法として、自分の発表の様子を録画し、その動画を見直して自分の発表を振り返る活動を取り入れた。これにより、相手にどのように伝わっているかを自分自身で客観的に振り返ることで、さらに聞き手を意識した発表ができるのではないかと考えた。

最初は、「自分の写っている姿を見返すことが恥ずかしいから見たくない」と言っていた生徒も、級友からのアドバイスで自分の動画を見返し、さらにはそのアドバイスの意味を理解して、さらなる改善にむけて試行錯誤する様子がみられた。

４　おわりに

本研究を通して、英語を話すことに苦手意識をもっていた生徒たちが、興味・関心を生むような工夫をしたり、互いにアドバイスをしたりする機会を意図的につくることで、自信をもってとりくもうとする様子がみられた。今後もさまざまな方法で、生徒たちの「話すこと」の力をのばしていきたい。一方、タブレットを使用した発表の際に、生徒の視線がタブレットに集中してしまったり、映像を見ているときに他の生徒が時間をもて余してしまったりすることがあった。生徒の主体的・対話的な学びのために、どのようにタブレットを活用していくことができるかについて研究を行っていく必要があると感じた。